

(牧師室より)

[塩狩峠]

先週朝5時過ぎにいつものようにラジオを聞きながら洗面をしていたら、「毎朝便り」で北海道ワッサム町の石田という婦人が「塩狩峠記念館」の話をしていました。この記念館は明治42年2月28日にこの峠で殉職した長野政雄氏を記念するために建てられたとの事。2月28日、まさに本日ですね。この長野氏をモデルにした小説が三浦綾子の「塩狩峠」になります。鉄道職員である長野氏がたまたま乗り合わせた宗谷線の列車がこの峠にさしかかり逆走を始めこのままでは列車が転覆して多数の死者の生まれることを予期して氏が自ら列車より飛びおりて線路に身を横たえ暴走をとめたという出来事です。小説には冒頭にヨハネ12章24節の言葉が掲げられています。まさに氏は「一粒の麦」として自らの命を多くの人々の救助のために献げたことです。三浦さんはかねて旭川六条教会員ですが同教会の大先輩に長野氏のあることを知って感動し資料を集めて小説化しました。三浦さんはあとがきに記します。「あの峠を越える時、キリストの僕(しもべ)として忠実に生き、忠実に死んだ長野政雄氏を偲んでいただきたい。そして、氏が新年毎に書き改めては、肌身離さず持っていた遺言の、『余は諸兄姉が、余の永眠によりて、天父(神)に近づき、感謝の真義を味わわれんことを祈る』という一条を心をひそめて思い出していただきたい」。